



Title	レジュメ
Author(s)	地田, 徹朗; 風戸, 真理
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 5, 202-205 中央ユーラシア研究を拓く: 北海道中央ユーラシア研究会第100回記念. 北海道中央ユーラシア研究会編
Issue Date	2012-11
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/51959">http://hdl.handle.net/2115/51959</a>
Type	bulletin (other)
Note	北海道中央ユーラシア研究会 第100回記念大会. 第2部. ISBN: 9784938637736
File Information	SEP5_010.pdf



[Instructions for use](#)

<レジュメ>

宇山報告へのコメント

地田 徹朗

(北海道大学スラブ研究センターGCOE 学術研究員)

- 第2回(2000年)、第62回(2007年)、第88回(2010年)で報告、第94回(2011年)で討論者→研究者として育ててもらった場
- 北海道中央ユーラシア研究会:多様なテーマ・世代の報告者(若手が中心で最近は近現代の報告がより多いとはいえ)→日本の中央ユーラシア地域研究の一つのセンター←「センター」がなくなりつつあるソ連史研究者からすると非常に羨ましい
- 自分は「ソ連史研究者」「中央アジア地域研究者」を自負しているが、ディシプリンの面でも言語の面でもコメンテーター3人の中では最も「根なし草」→自分の研究者としての生存戦略を常に考えねばならない立場

1. 文理融合型研究、マクロ・ミクروسケール融合型研究

- 総合地球環境学研究所の貢献→理系研究者が文系研究者の話に耳を傾ける、及び、その逆という新たな流れを築いたこと
- 歴史学者・政治学者→理念、政策; 文化人類学者→生業の実態、史の変遷; 農学者→農業(農法・灌漑)の実態; 地理学者→景観変遷などなど、各々のディシプリンの研究者が徹底的に話し合っ、研究成果を組み合わせることで、歴史・現状が重層的に見えるようになる
- ソ連史研究者→マクロなスケールでの歴史⇔文化人類学者→ミクロなスケールでの生業変化など:この両者を対話により融合できないか; 歴史研究者が文化人類学者と協働でフィールドに出るというのもあり。オーラルヒストリーにマクロなバックグラウンドを加える

2. 世の中のニーズにより敏感な研究を

- 「根なし草」が生き残るためには、「世の中が求めていること」にある程度敏感でなければならぬ→自分の核となる関心は保持しながら、あまりに細かな事柄に深入りしすぎるのではなく、研究の全体性を見据えながら柔軟に対応していく必要性
- 中央アジア・コーカサス諸国での専門調査員制度→内側からでしか見えてこない政治のロジックを知る; 小規模公館で多様な外交実務に肌で触れる

- 中央アジア地域研究の面白さを伝える「工夫」→そのためにも他地域の地域研究との対話の推進を（現在のスラブ研究センターはその点では恵まれている）
- Association for Border Studies 年次大会での体験→「地域」ではなく「テーマ」でセッションを分ける「境界研究」の可能性

北海道中央ユーラシア研究会 第 100 回記念大会 第 2 部

<レジュメ>

北海道中央ユーラシア研究会第 100 回記念大会のコメントにかえて  
風戸 真理

(国立民族学博物館外来研究員)

第 100 回記念大会の開催、おめでとうございます。宇山智彦先生による、1993 年からの研究会発足と 2000 年からの大学院設置のお話を受けて、私自身がどのような研究をどのような研究環境のもとでおこなってきたのかを紹介させていただくことによって、北海道中央ユーラシア研究会の意義を考えたいと思います。

私は人類学の立場からモンゴルの遊牧民を対象として 1994 年から調査研究をおこなってきました。きっかけは高校 1 年生の時にカルムキアの女の子と文通を始めたことにあります。時間をかけて届けられるソ連邦からの手紙と贈り物がいつも楽しみで、ソ連が大好きでした。

大学生になってカルムキアをたずね、ハリムク人が自らの故地であると語るモンゴル高原に憧れをいだくようになりました。そしてモンゴル研究を志して京都大学大学院人間・環境学研究科の人類学講座に進学しました。師事したのは人類学者でありアフリカニストである菅原和孝先生です。講座には、日本・アメリカ・アフリカ・アジア・オセアニアとさまざまな地域で調査をしながら人類学を志す仲間がいました。そのなかで私は、1990 年代のモンゴル国で遊動的牧畜がどのように営まれているのかを牧民の生活史と実践に即して解明し、また牧民が家畜をどのような存在として認識し、その認識に基づいていかなる生業戦略を組織しているのかを、国家の政治経済体制の変化、および自然条件の長期的な変動と関連づけて明らかにしました。

2003 年からは PD として京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科のアフリカ専攻に所属し、やはり人類学者でありアフリカニストである太田至先生のもとで研究を深めました。アフリカ専攻には人類学徒が多く、私たちはよく議論し、読書会などを通して一緒に学びました。そのなかで私は、モンゴルの社会主義的な牧畜集団化政策とその解体過程を再構成し、牧民が社会主義をどのように経験し、ポスト社会主義状況にいかに対処してきたのかを検証しました。現在は、ユーラシアのポスト社会主義の諸社会において、生産者である人と生産されるモノとのあいだにどのような関係が取り結ばれてきたのかを、家畜、銀製品、フェルト製品などに焦点を当てて、現代の歴史的変化のなかで検討しています。

このように私はアフリカ研究者のなかで学んできましたが、近い地域を研究する仲間と出会うと楽しいものです。この研究会に入れていただいたことに深く感謝しています。同

じ地域（いろいろな切り取り方がありますが）を扱う人びとと共同研究に取り組み、そして実際に会うことは、通信手段が発達した今でもとても大切なことだと思います。同時に、そのような場、すなわち同じ地域の研究者が会うしくみを作り、維持することの大切さと大変さを思います。記念大会から京都に戻った翌日、私はもうひとりのモンゴル研究者と会って、モンゴルでフィールドワークに取り組む人びとが集う場を作るための相談をしました。北海道中央ユーラシア研究会の蒔いた種が遠方で芽を出しつつあるようです。